

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

幼き日してはならぬと諭されたことの真逆が
まかり通る世 札幌市 佐々木さと子
 △評▽例えばウンをつくこと、欺くこと、
人を不幸に陥れることなどか。今の世に対
する作者の深い嘆きが伝わってくる。

戦前戦中戦後を生きてきた桜をながめる祖母
の目見つめる 相模原市 榎本 ハナ

△評▽同時代を生きてきた桜と祖母。桜を
ながめる祖母の目見つめる」の描写が見事。
土蔵より古きラジオを子が見つけ不思議がる
なり今が流れて 金沢市 竹内 一二

車窓から逃げない月のからくりを解けないま
まで大人だなんて 福津市 原田 冬

東京で星は見えぬと聞いた日も連なる春の大
三角は 東京 畑 えな

衝突事故の被害者であり加害者のあなたに寄り
添うクレームマンわれ 宝塚市 藤田 晋一

確実にほんとうだった感情をおきわすれたい
春の原っぱ 取手市 奥山いすみ

うわすった声を隠さず言うのならあなたのい
ない春はさみしい 大阪 中村 杏

その続き聞いてみたくなるような下車した二
人の気になる会話 白井市 毘舎利道弘

ゆきちがいのラインで娘と争うて爆弾くらった
私であるよ 大阪市 森川 慶子

米川千嘉子 選

空っぽの子宮も痛む 生きているだけでえら
いって母は言わない 東京 遠野 鈴

△評▽女性なら子どもを産んで当然と考
えている母との薄は同性ゆえにいっそうつら
い。上二句のフレーズがリアルだ。

断捨離の憂き目と思わず 人形国々の衣装
の誇りに満ちる 藤沢市 井上 渚

△評▽民族衣装を着た人形たち。国や世界
を語って夢があった時代のことと思う。

昨日抱いた孫のかじった肩口から甘く優しい
乳の匂いが 久留米市 春日 登

声あけて笑わぬわれと気づかされ「あはは」
と走るおさな子を追う 野田市 片倉 伸明

ゴール入れられればなしの五歳児の矜持か
動画見せてはくれず 高崎市 樋浦マサエ

父の死も淡くなりゆく母と食むばた餅の丸、
あんの紫 日野市 西海 香子

不満があらは言ひたまへご飯のあと深きため
息ひとつつく犬 千曲市 中村 美樹

花あげてくれたは誰か墓に問ひ夫とその人
も手を合はす 仙台市 五十嵐 舞

五メートル先から師の声飛んでくる迷って動
かす筆への叱責 横浜市 島田 和生

縦に伸び横に拡がる都市に棲みだんだん縮ん
でいくわたしたち 名古屋市 浅井 克宏

加藤 治郎 選

上階でシャワーを浴びる音すれば私は洗濯機
を回しおり 千葉市 佐藤 綾子

△評▽集合住宅である。日常的であり現代
的な歌である。それでもシャワーと洗濯機
は水に関わる縁語的なつながりなのだ。

階段の隣にできる長い列あえスカレーター
があるんだね 札幌市 橋 晃弘

△評▽街の風景だ。ありのままの事実だろ
う。人間の少しさみしい習性を表している。

本当の荒野は日本にはなくて君と進んでいく
遊歩道 名古屋市 森本 有

君が描きし裸婦のデッサンゆづべのあたしの姿
とどちらが綺麗ですか 清瀬市 貫地谷桃香

うたの海、詩の潮風を航海したどり尽くせぬ
かもめの軌跡 平塚市 芝澤 樹

空港が好き、ここからはどこへでも思い立っ
たら飛び立てるから 横浜市 友常 甘酢

職場にて介助に励む己が手や彼方此方に戦
光る 須崎市 野中 泰佑

陽だまりにゆらめくヒマス これからのことを話
そう、希望はここに 四万十市 佐竹 紫円

死ぬときは一緒だなんて手袋はいつも片方だ
けが落ちてる 名古屋市 浅井 克宏

一人分らしきマックの袋下げ坂道下る男性ひ
どろ 川崎市 佐久間喜賢

水原 紫苑 選

輪郭は離れてもなおあざやかで あなたがわた
しの死であったこと 宮古島市 塩見 伴

△評▽他者をみずからの死とすること、そ
れは最高の愛だろう。しかし、これは過去
形なのだ。ならば今は。

空と海いずれも奥に暗闇をかかえ青とは秘密
持つ色 東京 石川 真琴

△評▽青という色をこの角度から捉えた歌
は新鮮である。だからこそ青は永遠なのか。

取り壊す家屋のように待っている積乱雲に指
をこすって 岡山市 松井 度

神さまの指示で狂った羅針盤北極星は海へ飛
び込む 横浜市 砂月 七

バイロイト祝祭管弦楽団 神が吐瀉した星空
を弾く 雲南市 熱田 俊月

これでまう書かぬのですか止めですか八松浦
寿輝全詩集▽買ふ 東京 斑山 羊

罪状は何であったか人類は微笑みながら桜の
檻へ 東京 無地ムジカ

白黒の存在しないショパンさえよみがえらせ
る辻井伸行 札幌市 橋 晃弘

桜には負けたくないと菜の花は利根川の土手
黄色に染めおり 西東京市 佐々木節子

あとはもうどうにでもして土でなく枝垂れ桜
は天より咲きくる 宮津市 野 ばら

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます

おこわ

次回(22日)に掲載します。